

12. 国際企業戦略研究科（専門職学位課程）

I	国際企業戦略研究科（専門職学位課程）	
	の教育目的と特徴	・・・12-2
II	「教育の水準」の分析・判定	・・・12-3
	分析項目 I 教育活動の状況	・・・12-3
	分析項目 II 教育成果の状況	・・・12-5
III	「質の向上度」の分析	・・・12-7

I 国際企業戦略研究科（専門職学位課程）の教育目的と特徴

1 研究科の設立趣旨・教育目的

一橋大学大学院国際企業戦略研究科（一橋ICS）は、本学の6つ目の研究科として、平成12年に設置された。ICSとはInternational Corporate Strategy（国際企業戦略）の頭文字である。

明治8年の設立以来、本学は多くのキャプテンズ・オブ・インダストリーを輩出してきた。一橋ICSは、その伝統を受け継ぎつつ、「国際経営戦略」、「金融戦略・経営財務」、「経営法務」という3つの職業分野において、グローバルな規模で社会に貢献できるスペシャリストの育成に焦点を当てた高度な専門教育を行うことを目的としている。「国際経営戦略」、「金融戦略・経営財務」が専門職大学院（平成15年までは専門大学院）である。

2 各コースの特色

「国際経営戦略（IBS）」

国際経営戦略コース（以下、「IBS」という。）は、実務経験3年以上の者を対象に国際的なビジネスのプロフェッショナルを養成するプログラムとして設置された。そのビジョンは「Best of Two Worlds」（二律背反の実現）であり、西洋と東洋、実践と理論、新しい経済と古い経済、持てる者と持たざる者などの間の架け橋となることである。そのため、教育手法では世界中のビジネススクールで広く用いられるケース・メソッドを採用する一方、ナレッジ・マネジメントやグローバル・シチズンシップなど他のビジネススクールにはない特色ある授業を必修科目としている。すべての授業は英語で行われ、様々なバックグラウンドを持つ学生が世界中から集まっている。所属教員には実務経験を有する者、欧米のビジネススクールのMBAを取得した者、欧米の大学院で教鞭を取った経験を持つ者を多数擁する。学生と教員の比率は4：1で、全学生がゼミ制度に参加し、他のビジネススクールでは経験できない丁寧な指導を受けることができる。

「金融戦略・経営財務（FS）」

金融戦略・経営財務コース（以下、「FS」という。）は、実務における様々な問題を潜り抜けるタフネスと、問題解決能力を併せ持った、金融における「知的体育会系」人材を育成する。プログラムは、プライシングやインベストメント、リスク管理に係る計量的なファイナンス分析を学ぶ「計量ファイナンス系」と、M&A、事業再生、パイアウト、バリュエーション、金融機関経営、経営戦略を学修する「経営財務系」に分かれ、学修目的に応じてファイナンスを広くそして深く学ぶことができる。金融に関わる様々な分野の人材が集まり、異なるバックグラウンドを持った仲間と意見を交わせることで、金融機関、事業会社、その他ファイナンスの知識を必要とするあらゆる者にとって、有用かつ効果のあるプログラムである。

[想定する関係者とその期待]

本研究科では、国際経営、金融・財務、経営法務に関する高度で先端的な専門教育を希望する学生、これらの学生を送り出す企業、及び、採用する企業を想定している。これらの学生及び企業は、高度専門職業人としての最先端教育の修学を期待している。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

国際企業戦略研究科は、その使命に従い自己完結的な教育実施体制を構築している【資料 12-2-1】。教員編成について、専任教員は 22 人、このうち女性教員は 3 人(比率 14%)、外国人ないし外国での教育経験を持つ教員は 8 人である(平成 27 年 12 月 1 日現在)。

I B S では、世界を率いる新しい世代のビジネスリーダーを育成するというミッションを実現することを目指し、英語による教育プログラムを提供している。

1 学年の学生数 60 人以下と規模を抑え、教員 1 人に対し学生 4 人と、海外の M B A プログラムと比べはるかに密度の濃い教育体制をとっている。さらに、専任教員は、全員が海外の大学での学位取得又は教育経験を有し、6 割以上が実務経験を有する。女性と外国人の比率は各 2 割である。

ほかにも、従来の「2 校間パートナーシップ」に加え、平成 23 年以降、「3 校間アライアンス」、「多校間ネットワーク」に参加して、海外の有力校との連携を一層強め、学生に海外での多様な学修機会を提供している。

F S では、複雑化・高度化する金融に関わる問題を深く理解し、データの定量的分析を経営判断に生かすことができる高度金融人材の育成をそのミッションとし、日本語による夜間開講の社会人向けのプログラムを提供している。教員 1 人あたりの学生は 5 人程度である。志願倍率の低迷に対応すべく、入試説明会の時期を前倒しし、オープンキャンパスの実施、合同イベントへの出展、ウェブサイトの改訂等、P R 活動を強化し、大幅な志望者倍率増加に繋げている。

内部質保証については、2 コースとも、毎学期終了後に授業科目の内容やカリキュラム全体に関する評価について、学生アンケートを実施しており、アンケート結果を教員の間で共有するなどして、授業内容・手法の改善に役立てるとともに、カリキュラム改編に活用している。

また、月に 1 度のコース別教員会議において教育内容・手法改善について検討するほか、I B S では、年に 1 度年間を通したコース全体の内容に関する検討会、各学期の開始前に授業科目間の Coordination Meeting 等を実施している。F S は、カリキュラムの改善など長期的課題について議論する目的で半年ごとに F R (faculty retreat) を実施している。

外部評価という点では、I B S と F S は、A B E S T 21 の認証を受けており、I B S は新たに A A C S B のメンバーとなり、その認証取得のための取組を行っている。

【資料 12-2-1】 各コースの教育実施体制

コース名	
I B S (国際経営戦略コース)	世界を率いる新しい世代のビジネスリーダーを育成するというミッションを実現することを目指し、すべて英語による教育プログラムを提供している。
F S (金融戦略・経営財務コース)	複雑化・高度化する金融に関わる問題を深く理解し、データの定量的分析を経営判断に生かすことができる高度金融人材の育成をそのミッションとし、日本語による夜間開講の社会人向けのプログラムを提供している。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

「組織の編成上の工夫」、「教育の質の改善・向上」のいずれも、第 1 期において構築した高いレベルの体制を基本的に維持しつつ、各コースとも新たな取組を積極的に展開している。

I B Sの海外連携の一層の強化にみられる「国際化」や「外部との連携」は、グローバル化社会で活躍できる高度専門人材の養成を求める関係者の期待に応えるものであるといえる。

さらに、認証や外部評価への取組によって喚起される自己変革への指向は、カリキュラム改編など、具体的な教育内容や教育体制の改善に繋がっている。これも、学生層と高度専門人材の供給を求める社会の期待に応えるものである。

これらのことから、期待される水準を上回っていると判断する。

観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

学位授与の方針に基づき、次のような教育課程編成上の工夫を行っている。

I B Sのカリキュラムは、必修科目、選択科目、集中講義型の特別科目から構成されている。自身の将来や社会の課題について広い倫理観や大きな歴史観に立って考えるための集中型の特別科目を必修科目として提供している。カリキュラム・デザインについては、学生に大きな自由度が与えられており、2年制プログラムと1年制プログラムの選択もできる。

F Sのカリキュラムは、講義科目の履修と、専門職学位論文の作成を教育課程の二つの柱としている。修了要件である専門職学位論文は他の社会人大学院に比して際立った特徴である。最近では、寄附講座等を増やし、ビジネスの最前線で活躍する実務家の講義で最先端の実務に触れる機会を設けている。

2つのコースではいずれもゼミ（演習）が必修となっている。

また、各コースにおいて、次のように様々な教育方法や学習支援の工夫を行い、教育課程の実効性を高めている。

I B Sでは、学生・教員とも国際性と多様性に富み、世界を牽引するリーダーの育成というミッションに基づき、授業は英語で行っている。また、海外の有力校との連携強化により、ダブルディグリー・プログラムや交換留学、インターンシップなど海外で学ぶ多様なメニューが用意されている。教育方法は、ケース・メソッドを中心とし、双方向・参加型の多様な教授法を用いている。少人数のゼミ制度により、きめ細かな指導を受けることができる。

F Sでは、専門職学位論文の作成について、ゼミでの指導教員による丁寧な指導に加えて、提出期限の約2か月前の原稿提出と約1か月前のプレ報告会をマイルストーン（節目）とし、教員間で学生の進捗について情報共有し、指導教員以外の教員も助言を与えるようにしている。金融データベースの代名詞というべき Bloomberg 端末は学内で唯一F Sが保有しており、レベルの高い学位論文作成に不可欠な学修資源となっている。そのほか、従来の平日夜間のみでの授業に加え土曜の授業実施など、学生の要望を踏まえ、働きながら学ぶ社会人が柔軟に履修計画を立てられるよう不断の改善を行っている。

さらに2コースとも、本学の伝統である少人数制のゼミでの指導が行われており、I B Sでは、多様な国籍・バックグラウンドからなる学生のきめ細やかな指導のため、F Sでは、学術研究の経験のない社会人大学院生が本格的な研究論文を作成するための指導の場として、ゼミは重要な役割を果たしている。

加えて、I B S、F Sの提供する講義科目の相互履修が可能であり、修了単位への算入も認められており、複雑な課題を解決するために求められる学際的な視点の導入を可能としている。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

2コースとも、「教育内容」については、そのミッションを果たすために構築された従来の体系的な教育課程を基本的に維持し、「教育方法」については、一橋大学の伝統である少人数制のゼミを通じたきめ細かな指導が引き続き効果を上げている。

また、コースごとにそれぞれの目的に照らして様々な教育方法や学習支援の工夫を行っている。

これらのことから、期待される水準を上回っていると判断する。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

（観点に係る状況）

I B Sは、昼間の英語によるプログラム、F Sは社会人を対象とした主として日本語による夜間開講のプログラムであり、学業の成果の捉え方が異なるため、学業の成果を把握するための取組とその分析結果について、両者を分けて説明する。

過去5年間の修了者数は、それぞれ資料12-2-2のとおりである。

1. I B Sは、修了に必要な単位を66単位以上としている（2年制は70単位以上）。ゼミの単位（4単位）に加えて、講義科目62単位以上を修得する必要がある。各科目の成績は相対評価で行う。授業開始時に評価基準を明らかにすることにより公平性、公正性を確保している。修了単位数66単位のうち、40単位以上においてAかBかPassの成績を修めるという修了要件を、例年、ほぼ全員がクリアしており、学業の成果は上がっていると考える。

また、MBA学生向けの各種の国際大会において、例年、本コース学生が予選を勝ち抜き、本選に進出することが常となっていることも学業の成果が上がっていることの例証である。

さらに、授業に関するアンケート調査を学期毎に実施しており、評価項目は授業内容に関するものと担当教員に関するものが各7項目あるが、満足度は総じて高い。

2. F Sは、2年制で講義科目26単位以上・演習8単位以上の34単位以上を修得した上で、学位論文の審査と最終試験に合格することが修了要件とされている。

社会人であることや働きながらの修学であることを理由に修了要件の学位論文のレベルを安易に下げることにはせず、通常の修士課程と同等の、学術的にも意義を認められる学位論文の完成を求める姿勢を堅持し、論文審査について高い基準を設けて審査にあたっている。

また、毎年度末に当該年度の専門職学位論文のうちで特に評価が高いものを6編選抜して、一般公開という形で優秀論文発表会を行い、優れた論文完成に向けた学生のモチベーションを高めている。

学位論文を基礎とした論文が査読付学術誌に掲載されるなど、外部の高い評価を得た例もあり、高いレベルの学修成果が上がっている

講義科目については、中間レポートや中間試験といったマイルストーン（節目）を設定するなどして、学生の理解度を把握するとともに、定期末には、試験やレポートの形で厳格な成績評価を行っている。

学期毎に、学生アンケートの形で、各授業の理解度、授業の内容・水準に関する満足度、カリキュラム体系に関する満足度など、自由記載欄も設けて調査を行っているが、授業の理解度も十分なレベルにあり、学生の満足度は高い。

【資料12-2-2】 修了者数の推移

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
I B Sコース	56	52	46	52	47
F Sコース	31	32	38	38	36

（水準） 期待される水準を上回る

（判断理由）

I B Sでは、学生に求める高い修了要件が学習成果につながっている。F Sでは、学術的に一定のレベルをクリアした論文を完成させることを修了要件とすることで、学修成果を確かなものとしている。優秀な論文は、査読付学術誌への掲載に至るなど、外部の高い評価を得た例も少なくない。両コースともに、毎学期行われる学生アンケートにおける授業やカリキュラムに対する満足度は高く、学生の授業の理解度も良好なレベルにある。

これらのことから、期待される水準を上回っていると判断する。

観点 進路・就職の状況

（観点に係る状況）

1. I B Sは、キャリアに関する専門スタッフによるきめ細かな就職支援を行い、企業派遣の学生等を除いてほぼ全員が希望する企業や組織に就職し、世界各地で活躍している。外国人留学生の約半数は修了後に日本で就職しており、世界で活躍する日本人の育成と合わせて、日本のビジネスに興味を持つ外国人が修了後に日本で専門職業人として活躍する機会を提供することについても成果を上げている。

2. F Sで学ぶのは有職社会人で、修了後も勤務先での業務を継続するのが通例であるため、大学による就職支援は想定していないが、修了生に対する調査では、「獲得した専門的知識と論文作成のプロセスで学んだ理論的思考能力が実務的能力を大きく向上させた」という声が多く、学業を修めた成果がキャリアアップに寄与しているというコメントが寄せられている。異業種企業やシンクタンクへの転職、大学の教職への転職例もある。

修了後も、学術的研究への関心を失うことなく、仕事の傍ら研究との関わりを持ち続ける修了生が多いことも特筆すべきである。修了生が学位論文を洗練させて査読付き学術誌や学術専門誌に論文を公表・学会報告を行う例は、増加傾向にある。これは、実務的課題を理論的に解きほぐす知的営みへの関心が定着し、在学中に学んだ方法論を使いこなし自立して研究を発展させていく能力を身に着けたことを物語っている。なお、教員は、修了生の修了後の研究継続を直接・間接にサポートしている。

さらに、修了生を対象とした科目履修生制度に多くの修了生が参加しており、修了生同士でネットワークを広げる場をアレンジしている。

このほか、F Sでは第2期の博士課程への入進学者は内部進学または専門職学位課程修了生の入学のみであるが、そうした内部進学者数は第1期より増加しており【別添資料12-2-A】、修了後も研究への意欲を維持するケースが増加傾向にあり、学び続けようとする知的な意欲の醸成という観点からも教育の効果が上がっているものと考えられる。

【別添資料12-2-A】 国際企業戦略研究科ウェブサイト「博士課程各種統計情報」
(http://www.fs.ics.hit-u.ac.jp/doctor_course/statistical/)

（水準） 期待される水準を上回る

（判断理由）

I B Sでは、修了者が希望の企業等に就職し、世界各地で活躍するとともに、日本を理解しグローバルな視野を持った外国人が高度人材として日本で活躍することにも貢献している。

F Sでは、修了生の調査等で学業を修めたことが、実務能力の質的向上、キャリアアップに役立ったと評価されており、高度専門職業人の養成という使命を果たしているといえる。修了後も仕事と並行して研究を継続するなど、学び続けようという意思を持つ修了生を多数輩出していることは、教育内容・方法が単なる知識やスキルの詰め込みではなく、学問と理論を架橋した複眼的な思考力を涵養することに成功していることの表れである。

これらのことから、期待される水準を上回っていると判断する。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ 教育活動の状況

事例１ 教育実施体制

「組織の編成上の工夫」について、IBSは、従来の「２校間アライアンス」に加えて、「３校間アライアンス」や「多校間ネットワーク」に新たに加盟し、世界展開の３本柱として海外有力校とのネットワークを着実に広げている。「外部との連携」、「国際化」について重要な質の変化をもたらすものということができる。

「内部質保証システム」については、各コースともウェブサイトの全面改訂、オープンキャンパス、各種メディアを通じた広報活動など、第１期以上に、外に向けた情報発信を強化し、外部の関係者や有識者の声を聞く試みも始めている。IBSは、平成２６年に国際認証機関「AACSB」のメンバーとなり、その認証取得に向けた取組を行っている。例えば、AoLを進めるプロセスで、既にいくつかの科目について質的な向上が見られる。具体的には、平成２７年度に、required coursesのLearning goalの明確化、IBSのMissionとのつながりの明確化、成果の評価基準の明確化、当該基準に従った評価の実施を進めている。外部の評価やアドバイスに耳を傾けつつ自己変革を図ろうという意識が高まっていることの表れとして高く評価できる。

以上から、第１期と比較して重要な質の変化であると判断する。

事例２ 教育内容と教育方法

評価期間中、IBSは、「３校間アライアンス」や「多校間ネットワーク」に新たに加盟し、学生の海外での学習機会を豊富化するとともに、世界水準のビジネススクールとしての認知をさらに高めている。第１期と比較すると、「国際化」の推進による教育内容・方法の質の変化が指摘できよう。

評価期間中には、２コースともカリキュラム改革として、FSは、１単位制の新設や土曜授業の開始など、IBSは国際認証機関「AACSB」の認証取得のための取組などを行っている。

また、外部環境の変化に対応し不断の自己変革が行われており、第１期よりも教育内容・方法の質の向上が図られていると判断する。

（２）分析項目Ⅱ 教育成果の状況

事例１ 学業の成果

IBSでは、第２期におけるMBA修了生のほぼ全員が高い修了要件をクリアしている。

修了生に対する調査では、「獲得した専門的知識と論文作成のプロセスで学んだ理論的思考能力が実務的能力を大きく向上させた」という声が多く、学業を修めた成果がキャリアアップに寄与しているという声が寄せられている。

さらに、FSで博士課程への内部からの進学数が第１期より増加するなど、修了後も研究への意欲を維持するケースが増加傾向にあり、学び続けようとする知的な意欲の醸成という観点からも教育の効果が上がっているものと考えられる。

事例２ 進路・就職の状況

IBSは、キャリアに関する専門スタッフによるきめ細かな就職支援を行い、企業派遣の学生等を除いてほぼ全員が希望する企業や組織に就職し、世界各地で活躍している。外国人留学生の約半数は修了後に日本で就職しており、世界で活躍する日本人の育成と合わせて、日本のビジネスに興味を持つ外国人が修了後に日本で専門職業人として活躍する機会を提供することについても成果を上げてい

一橋大学国際企業戦略研究科（専門職学位課程）

る。

FSでは、修了後も、仕事の傍ら研究との関わりを持ち続ける修了生が多いことも特筆すべきである。修了生が学位論文を洗練させて査読付き学術誌や学術専門誌に論文を公表・学会報告を行う例は、増加傾向にある。

さらに、優秀な学位論文を洗練し査読付き学術誌等で公表し書籍として出版する事例は、第1期に比して増加傾向にあり、学術的観点からみた学業の成果の質は上昇しているといえる。